

平成 20~22 年度厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)
総合研究報告書

分担研究:不育症啓発ポスター作製

研究分担者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授

研究協力者 日本産科婦人科学会

研究協力者 NPO ハートビートくらぶ

研究協力者 中村和代 株式会社朝日エル

研究要旨

「不育症・流産」という疾患の啓発を行うためにポスターを作製し、日本産科婦人科学会員 15000 人に郵送した。

A. 事業目的

不妊症に対して不育症は 4.2 %の頻度で本邦の患者が存在するにもかかわらず、社会に認知されていない。日本人女性は「子どもを産んで一人前である」という“母性神話”的に流産経験を隠す傾向があるため、約 40%が流産経験者であるにもかかわらず、流産そのものも認知されていない。不育症患者の 85%が出産に至っている事実が「子宮奇形研究」で明らかになっており、患者の精神的苦痛を取り除くためにも流産・不育症に対する社会の理解が不可欠である。また、エビデンスが乏しいために標準化された検査、治療がないため、一般施設での検査が受けにくいとの患者の指摘もある。

流産患者、産婦人科医師に対して啓発を行うためにポスターを作製した。

B. 事業方法・結果

ポスターのコピーは原案を杉浦が作成し、ハートビートくらぶ理事らに患者の視点から内容を確認してもらった。ポスターのデザインは広告代理店スーパースタジオに委託した。

15000 部を印刷し、日本産科婦人科学会員に学会誌と共に郵送した。

2009年8月3日中日新聞「妊娠女性41%流産経験」

2009年11月13日朝日新聞「繰り返し流産16人にひとり」

2010年11月18日朝日新聞「不育症、多くが出産可能」

2010年6月25日 NHK長崎 長崎スペシャル「あなたに会いたかった～流産・死産に苦しむ女性たち」

2010年 NHK 福岡 九州沖縄インサイド「自分を責めないで～流産41%の衝撃～」

2009年8月3日中日新聞「妊娠女性41%流産経験」

The image is a collage of Japanese newspaper front pages from 2009, featuring several prominent headlines:

- 中日新聞 (Chubu Shimbun)**: "妊娠女性41%流産経験" (Experience of 41% miscarriage in pregnant women) and "「不育症」年8万人" (80,000 people with infertility per year).
- 朝日新聞 (Asahi Shimbun)**: "衆院選後 正式撤退も" (Official withdrawal after the House of Representatives election) and "河村・名古屋市長 公開討論会後、示唆" (After the public discussion meeting, implication).
- 毎日新聞 (Mainichi Shimbun)**: "厚労省研究班 調査" (Survey by the Ministry of Health, Labour and Welfare research group) and "全国の公私を問うた公的支援の現状" (Current status of public support for both public and private sectors).
- 読売新聞 (Yomiuri Shimbun)**: "女性の死産率、過去10年で半減" (Female stillbirth rate halved over the past 10 years) and "中止率も下落" (Abortion rate also declining).
- 新潟日報 (Niigata Nippo)**: "中止率、過去10年で半減" (Abortion rate halved over the past 10 years).

2009年11月13日朝日新聞「繰り返し流産16人にひとり」

1 14 版 ▲

1950年2月1日第3種郵便物認可

©朝日新聞社 2009年

45990号(日刊)

繰り返し流産 16人に1人

不育症、8割は治療受け出産

が、厚生労働省研究班による初の実態調査でわかつた。不育症の女性の4割は強い心のストレスを抱えていた。一方、専門外来で検査、治療した人のうち8割以上が無事、出産できていた。研究班は夫婦だけで悩まずに専門医を受診するよう呼びかけている。

研究班には、富山大、名古屋市大、慶應大などが参加。発生頻度は、名古屋市の杉浦真弓教授らが調べた。愛知県内で健康診断を受けた一般女性35~70歳)5033

名市大教授ら調査

不育症
妊娠はしても、流産を繰り返す状態をいう。このうち3回以上流産する場合を習慣流産といふ。子宮外でも育つ時期以前（妊娠22週未満）に発育が止まってしまう状態を流産、胎児が死んでいる場合を死産という。

本異常がある場合のほか、子宮の経験のある428人中、流産した人は190人(41%)いた。2回以上流産し不育症とみられた原因是夫婦の両者か一方に染色体の習慣流産も(2%)いた。

血栓ができるやすい抗リン脂質抗体症候群などが考えられた。専門外来を受診した1676組の不育症の夫婦を分析すると、剖で夫婦に染色体異常がないほのか、女性の子宮の形にも異常がなく、ほかの原因が考案された。杉浦教授によると、夫婦に明らかな異常がない場合の多くが、胎児の染色体異常が疑われるという。子宮の形に異常がある人は3%いたが、うち重症の42人中95%人が手術後に出産できた。別の分担研究では、抗リン脂質抗体症候群の場合には血を両まりにくくする

師は専門外来を受診した150組の心への影響を調べた。77組のうち、女性の33人(43%)、男性の11人(14%)に押つ傾向が見られた。原因として、長期の医療関連診や、高額な治療費などを挙げた。研究代表者の斎藤滋(富山大)は、「産科婦人科」は「流産を恐れたり返す」と三度妊娠したくなると考える人も多い。しかし、不育症の原因を突き止める方法や治療法もかなり進歩している。夫婦だけ産むのはなく、専門医を悩むのが欲しい」と語る。(坪井英紀)

2009年(平成21年)
11月13日
金曜日

朝日新聞名古屋本社 発行所: T 460-8488 名古屋市中区栄1-3-3
電話: 052-231-8131 www.asahi.com

2010年11月18日朝日新聞「不育症、多くが出産可能」

不育症、多くが出産可能

原因の大半、胎児の染色体異常か

不育症の主な原因と治療

- ①卵巣・副性腺の異常
 - 先天性疾患で卵が出来にくくなる
→アスピリン・ヘリシンなどの薬物治療
- ②子宮問題症候群
 - 子宮が二つに分かれている→手術手術などをすることもある
- ③胎児の染色体異常
 - 丈夫な卵子を出さない場合は、丈夫な卵子に代わる卵子を用いる
→卵巣刺激薬
 - 丈夫である
→丈夫である
- ④胎児の染色体異常
 - 夫婦に問題がないでも一定の割合で起きる、遺伝病のリスクがある
→卵巣刺激薬
 - 妊娠をめぐらしくする
→丈夫である

妊娠3回で8割出産

回数	割合
1回	21.3%
2回	67.5%
3回	70.3%
4回	62.9%
5回	51.2%
6回	32.1%
7回	25.4%
8回	21.4%
9回	14.1%

出典：福岡市立大調べ

効果不明の治療法

照葉サイト・アビタルに、意見交換や質問ができる「おきひろば」を開設しています。

医療

2009年NHK福岡九州沖縄インサイド「自分を責めないで—流産41%の衝撃」

